

## 大正期の高等女学校における女子野球実施の実態 — 学校創立記念誌の検討から —

### The Actual State of Women's Baseball at Girls' High Schools in the Taisho Era. — Analysis of the School Anniversary Magazines —

赤 澤 祐 美

Yumi AKAZAWA

#### I. は じ め に

国内では大正期の高等女学校において、女子(軟式)野球やインドアベースボール、キツンボールといった女子野球が行われていたことが先行研究により確認されている。当時の女子野球は野球を女子向きに改変して実施していたものの、野球は女子に不適切・過激であるとして批判・禁止され、大正末期には衰退しそのほとんどが見られなくなったとされている<sup>1)</sup>。一方で、高嶋<sup>2)</sup>は女子野球に難色を示していた文部省は、インドアベースボールと野球を明確に区別しており、インドアベースボールに関しては女子に不適切とは評価していなかったことを指摘している。そして「1925年以降女子野球はもっぱら校内で行われるようになったためか、あまり話題にされることがなくなったのは事実である」としつつも、「それは女子野球が消滅したことを意味するわけではなく、地方紙や校友会誌を調査すれば、より多くの事例が発掘される可能性があるだろう」と指摘している。また、1930年代における女子軟式野球実施の可能性も示唆されており<sup>3)</sup>、女子野球実施

の実態については今後さらなる検討が必要であると考ええる。

そこで本研究では、先行研究で女子野球実施校として名前があがっているものの、これまで詳細な検討はされてこなかった学校の女子野球実施の実態について、学校創立記念誌の検討から明らかにすることを試みる。具体的には、宮城県第二高等女学校(以下、二高女)、宮城県第一高等女学校(以下、一高女)、茨城県立水戸高等女学校(以下、水戸高女)、栃木県立宇都宮高等女学校(以下、宇都宮高女)、神奈川県立高等女学校(以下、神奈川高女)の5校について検討した。

#### II. 主な検討対象史料

主な検討史料は、各女学校の後身の学校が発行する学校創立記念誌とした。

二高女：『二女高90年』<sup>4)</sup>、『二女高百年史』<sup>5)</sup>

一高女：『六十年史』<sup>6)</sup>、『一女高百年史』<sup>7)</sup>

水戸高女：『水戸二高七十年史』<sup>8)</sup>、

『水戸二高百年史』<sup>9)</sup>

宇都宮高女：『80年史』<sup>10)</sup>、『100年史』<sup>11)</sup>

神奈川高女：『創立百周年記念誌《学校編》』<sup>12)</sup>、  
『創立百周年記念誌《同窓会編》』<sup>13)</sup>

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 二高女

大正11年に、御茶ノ水の教育博物館で開催された運動体育展覧会において女子野球の試合が計画され、この試合出場に勧誘された学校である。

二高女において野球部が創設されたのは大正10年のことであった。野球部が創られた当初は、部員たちが当惑するほどに世間の目を惹き、嘲笑的ともなったが、1年ほど経った頃には、自分たちの活動に自信を持ち、肩の弱さを克服し、記者の賛辞を受けるほどになったという。女学校同士の公式戦はなく、対戦相手を探すのに苦労したようで、小学校チームやゼントルマン倶楽部、新聞記者団チームなどの男子チームと試合を行っていた。

二高女で行われていた野球は、塁間を少年野球の規定と同じく12間とし、ミット・グローブを用いていた。ボールは硬球を使用したところ怪我人が出たために「スポンヂボール」を使用していたという。当時の写真からも、オーバースローで投球する様子や滑り込みをする様子が見られることから、「インドアベースボール」ではなく「野球」を行っていたことが伺えた。当時の野球部員であった懸田も「いま母校はソフトボールがさかんですが、私たちは野球をしました」と、区別して語っていた。

記念誌には『野球界』や『アサヒスポーツ』の記事をまとめたものも取り上げており、当時の女子野球の背景について「偏見や誤解などがあった」と記述している。その上で、二高女においても「大正14年を境に野球の記録が無くなる」としている。野球部の解散について明確な記述が見られるわけではないものの、二高女においても「野球」は1925年前後に消滅していたようである。

#### 2. 一高女

二高女の野球部設置を機に、仙台の女学生間に野球熱が高まり、大正11年春には一高女でも野球部ができることになったとされている<sup>14)</sup>。同年8月には第一高女は「強チーム」であり、第二高女と「何れ劣らぬ技倆の選手を所有してゐる」とも紹介されている学校である<sup>15)</sup>。

大正期の学友会の運動部の活動としては、軟式庭球、籠球、排球、卓球、陸上競技、水泳があげられていた。水泳を除く5種目では「県内高等女学校の中心となり、指導的な地位を占めている」というほどに運動部の活動が盛んだったようであるが、野球部の存在は確認できなかった。同窓会誌『友の葉』の創立百周年記念号<sup>16)</sup>への大正期の同窓生の寄稿においても、テニスやピンポン、バスケットボールやドッチボールという言葉は確認できるものの、野球やベースボールという言葉は確認できなかった。

記念誌には「昭和9年には、女子師範職員と、同年および11年には学務課職員と、それぞれ野球試合を行っている」という記述が見られたが、これは男性教職員チームの話であり、女学生の野球試合についての記述ではなかった<sup>17)</sup>。1点注目すべきは、1922年度の体育設備費内訳に「インドアベースボール外 3点」と記載されていることである。インドアベースボールを行うつもりで購入したのか、陸上の投種目等その他の用途で購入したのかは定かではないが、今後検討の余地があるかもしれない。

#### 3. 水戸高女

宮城県第二高等女学校とともに運動体育展覧会の野球試合出場に勧誘された学校である。大正末期の運動部の活動としては、やはり庭球が盛んだったようである。大正14年にはグラウンドを改造し、バレーやバスケットボール、テニスの競技場が新設された。しかしながら、野球についての記述は確認できなかった。『野球界』には、「水戸高女の小堀先生は、この秋迄には野球團を復活し

て、大いに活躍させたいと云うてをる」という記述が見られるが、旧教職員一覧からは「小堀」という人物は確認できなかった。

しかしながら、昭和8年卒業記念帖の「インドアベース」を行っている写真が掲載されている。この「インドアベース」がいつ頃から、どのような形で行われていたかは不明であるが、高嶋が指摘する通り、女子野球が消滅したとされている1925年前後以降にも、インドアベースボールが行われている様子が伺えた。

#### 4. 宇都宮高女

『野球界』において「良コーチを有する宇都宮高女」と紹介されている学校である。大正10年の運動部には、庭球、蹴球、弓術、円木の4部が、大正末頃には庭球、弓術、円木、球技、跳躍、徒歩の6部があった。「球技」ではバレーボールやバスケットボールが行われていたようである。また蹴球部は現在のサッカーとは異なり、ボールを蹴り上げてその高さを競うだけのものであったようである。この様な珍しい運動部も存在していたものの、野球部の存在は確認できなかった。

今回検討した史料には、主に大正初期と大正10年以降の運動部について記述されており、『野球界』において女子野球チームの「黄金時代をつくり上げた」とされる大正9年の運動部については確認することができなかった。また教職員の名簿などはなく、『野球界』に名前のあがっていた「小堀先生」の存在も確認できなかった。

#### 5. 神奈川高女

昭和7年に文部省が実施した「中等学校ニ於ケル校友会運動部ニ関スル調査」において野球部を設置していると回答した女子中等学校ではないかと指摘されている学校である。

大正13年6月21日には「放課後ベースボール大会」が、大正15年11月27日には「インドアベース大会」が開催されていた。同窓会の記念誌には、20期卒業生（大正7年4月入学）の「テニス、

ピンポンは思い思いに、インドアベースボールは吉田コーチも迎えて大活躍でした」という寄稿が掲載されており、「コーチ」もいたことが明らかとなった。また21期卒業生も「その頃インドアベースなるもの盛んにて、今は亡き中村はなさんの名ピッチャー振り、今も尚髭髯として浮ぶ」と寄稿している。「その頃」というのは大正11年のことであり、少なくとも大正11年から大正15年頃にインドアベースボールが行われていた様子が伺えた。昭和7年の文部省の調査時まで継続して行われていたかどうかや、対外試合を行っていた様子は確認できなかったものの、校内で大会を行う程度には盛んだったようである。

#### Ⅳ. お わ り に

本研究では、女子野球を行っていたとされる学校の創立記念誌から、女子野球実施の実態を明らかにすることを試みた。先行研究の指摘通り、二高女の「野球」は1925年前後にその記録が見られなくなるものの、「インドアベースボール」については昭和初期においてもその実施が見られた。しかしながら、女子野球実施校とされている学校であっても、その実施を確認することができなかった学校もあり、今後さらなる検討が必要であると考ええる。

今回検討した史料について、野球部の活動が詳細に書かれている記念誌もあれば、授業や課外活動の記述自体が少ない記念誌もあり、実態の解明には史料的な限界があった。今後は、校友会誌や同窓会誌、地方新聞等もあわせて検討していきたい。また、先行研究や当時の史料で確認できる学校名は「〇〇高女」という表記であり、正式な学校名は不明である。創立年などの情報から割り出しているものの、今回検討した学校が女子野球実施校としてあげられている学校として適切であったかどうかについても、再考する必要があるかもしれない。

本研究は、令和3年度国士舘大学体育学部附属体育研究所助成により実施された。

## 引用・参考文献

- 1) 庄司節子 (2011) 近代日本における女性スポーツの創造—大正期の東海女学生キツンボール大会への視線—, 創造とスポーツ科学, 57-71.
- 2) 高嶋航 (2019) 女子野球の歴史を再考する—極東・YMCA・ジェンダー—, 京都大学文学部研究紀要, (58), 165-207.
- 3) 赤澤祐美 (2021) 横井春野の人物像と女子野球普及活動, 東海学園大学教育研究紀要, (6), スポーツ健康科学部, 17-23.
- 4) 宮城県第二女子高等学校90周年記念事業実行委員会 (1994) 『二女高90年 かぐはしき未来へ』
- 5) 宮城県第二女子高等学校 (2005) 『二女高百年史』
- 6) 宮城県第一女子高等学校 (1961) 『六十年史』
- 7) 百年史編集部 (1997) 『一女高百年史』
- 8) 茨城県立水戸第二高等学校 (1970) 『水戸二高七十年史』
- 9) 茨城県立水戸第二高等学校百年史編集委員会 (2000) 『水戸二高百年史』
- 10) 栃木県立宇都宮女子高等学校「80年史」編集委員会 (1956) 『80年史』
- 11) 栃木県立宇都宮女子高等学校100年史編集委員会 (1976) 『100年史』
- 12) 神奈川県立横浜平沼高等学校創立百周年記念行事校内実行委員会編集部 (2000) 『創立百周年記念誌《学校編》: 学校百年のあゆみ』
- 13) 創立百周年記念実行委員会・歴史編集部 (2000) 『創立百周年記念誌《同窓会編》: 花たちばな』
- 14) 前掲書2)
- 15) 河北新報「女学校野球リーグ戦」1922年8月18日朝刊4面.
- 16) 宮城県第一女子高等学校同窓会 (1997) 『友の葉・創立百周年記念号』
- 17) 宮城県第一女子高等学校 (1997) 『学校創立百周年記念写真集: 一女高の百年』, p.48.